

第4次北サッカラ遺跡調査概報

河合 望^{*1}・吉村 作治^{*2}・柏木 裕之^{*3}・高橋 寿光^{*3}
米山 由夏^{*4}・石崎 野々花^{*5}・菅沼 奏美^{*6}・サリーマ イクラム^{*7}

A Preliminary Report on the Fourth Season of the Excavation at North Saqqara

Nozomu Kawai^{*1}, Sakuji Yoshimura^{*2}, Hiroyuki Kashiwagi^{*3}, Kazumitsu Takahashi^{*3}
Yuka Yoneyama^{*4}, Nonoka Ishizaki^{*5}, Kanami Suganuma^{*6}, and Salima Ikram^{*7}

Abstract

The Japanese-Egyptian mission to North Saqqara conducted the fourth season from February 19 to March 7, 2019. This project aims to search the location of the previously unknown New Kingdom cemeteries at North Saqqara and excavate them. In this season, we carried out excavation to the north of the trench C, which is located on the slope of the eastern escarpment between the old Inspectorate building and the old British mission's dig house. This paper reports the result of the fourth season of the project.

In the course of the excavation, we found a limestone wall extending a south-north direction, which can be interpreted as a kind of façade of something located underneath. Under the limestone wall, we found a rock cliff where a vault structure which may be connected to the entrance of a rock-cut structure was uncovered. There are two vertical limestone walls perpendicular to the aforementioned limestone wall found above. To the east of the limestone façade, we uncovered a debris deposit of pottery and terracotta figurines dating to the Roman Period. In the same layer, we uncovered three intact simple burials dating to the Roman Period. It is hoped that the entrance of the rock-cut structure will be identified in the coming season.

1. はじめに

古代エジプト新王国時代の北の中心地であったメンフィスの墓地であるサッカラについては、その重要性にも関わらず、これまで網羅的な調査が実施されてこなかった。サッカラにおいて新王国時代の墓を新たに発見、調査することにより、これまで南の中心地テーベに偏重してきた新王国時代史の再構築が期待される¹⁾。

このような問題意識のもとに、2015年度から科学研究費補助金基盤研究(B)(海外学術調査)「エジプト、サッカラにおける新王国時代の墓の調査研究」(研究代表者:河合望(金沢大学)、課題番号:15H05163)の助成を受け、

* 1 金沢大学新学術創成研究機構教授

* 2 東日本国際大学学長 / 早稲田大学名誉教授

* 3 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授

* 4 鶴見大学大学院文学研究科博士後期課程

* 5 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程 /

日本学術振興会特別研究員

* 6 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

* 7 カイロ・アメリカン大学社会学エジプト学人類学科教授

* 1 *Professor, Institute for Frontier Science Initiative, Kanazawa University*

* 2 *President, Higashinippon International University / Professor Emeritus, Waseda University*

* 3 *Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*

* 4 *Doctoral Student, Department of Cultural Properties, Tsurumi University*

* 5 *Doctoral Student, Department of Archaeology, Waseda University / Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science*

* 6 *MA Student, Department of Archaeology, Waseda University*

* 7 *Professor, Department of Sociology, Egyptology and Anthropology, American University in Cairo*

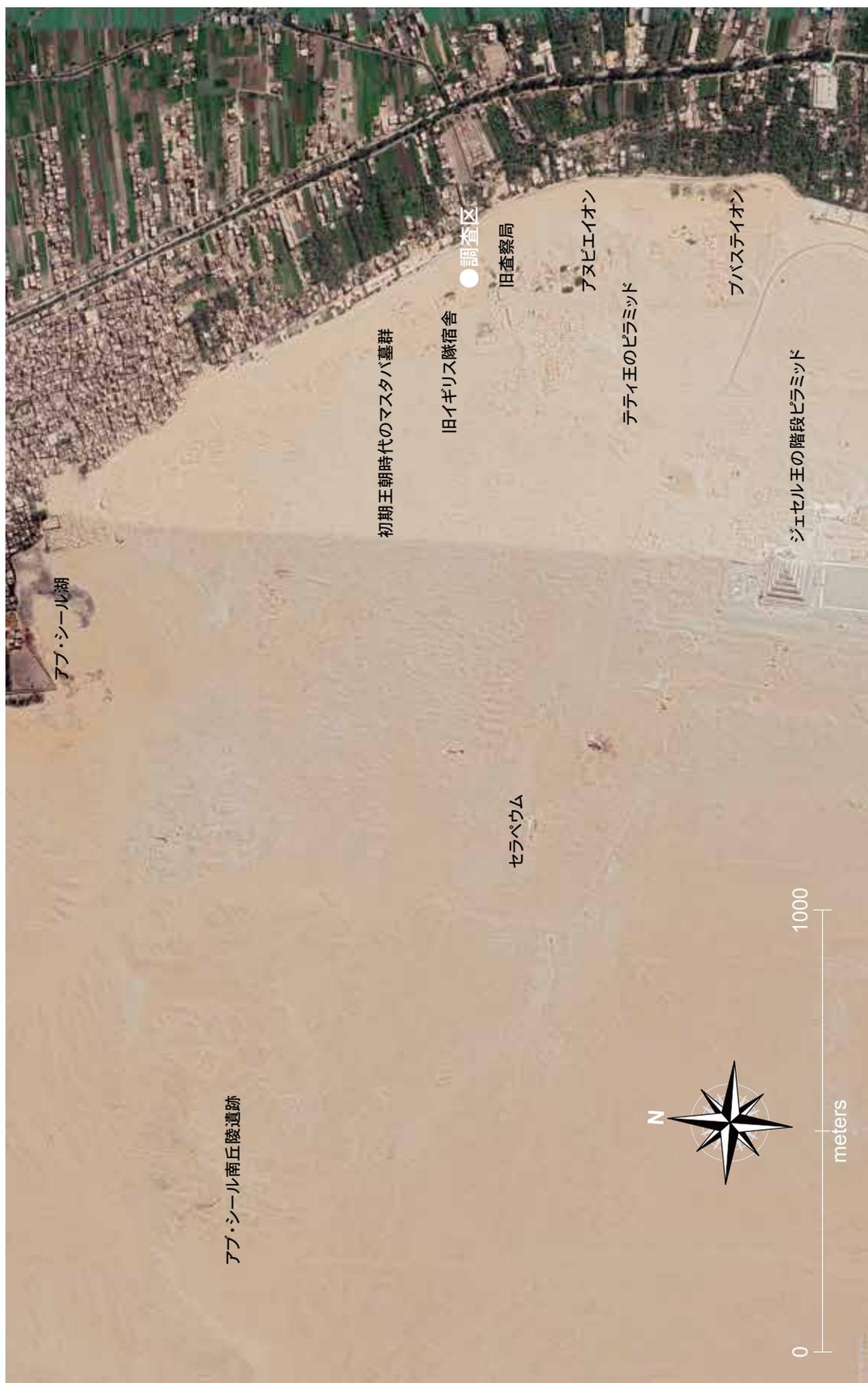


図1 北サッカラ地図
Fig.1 Map of north Saqqara

サッカラの新王国時代の墓をテーマとした調査研究を開始した。これまで踏査、測量、物理探査を行い、その結果、新たに新王国時代の墓地を確認するとともに、北サッカラ台地の斜面（C地区と呼称、図1参照）²⁾に未発見の新王国時代の岩窟墓群が存在する可能性が高いとの結論に至った（河合他 2017a, 2017b, 2018a）。これを受け、2017年の第3次調査において、C地区において試掘調査を実施したところ、付近に近年の攪乱を受けていない遺構が存在することが推定された（河合他 2018b）。

この成果を受け、第4次調査として、2019年2月9日から3月7日にかけて同地区にて継続して発掘調査を行った³⁾。本稿では、第4次調査の概要について報告を行う。

2. 発掘調査

(1) 発掘調査の概要

第3次調査では、C地区において、5m（南北方向）～30m（東西方向）の試掘区（Trench C）を設定し、試掘を行った⁴⁾。第4次調査では、この試掘区の北側に、Area 1からArea 4までの発掘区を設定し、発掘調査を行った（図2）。

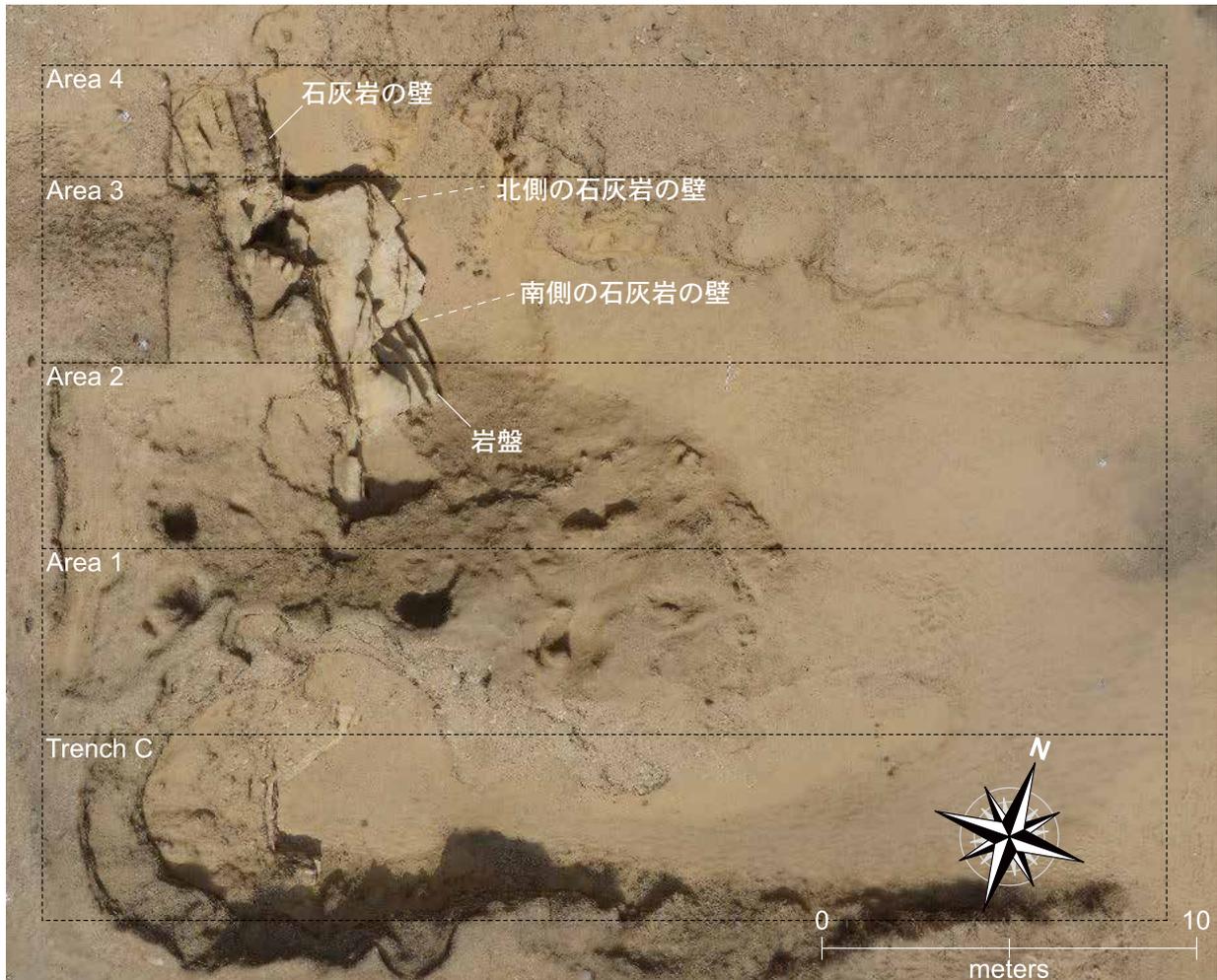


図2 発掘区（第4次調査終了時）
Fig.2 Map of the excavation site after fourth season

Area 1 から Area 4 までの基本的な層位について、図 3 に示す。各層の内容については、以下の通りである。

1. 黄色砂層（日干レンガ含む）：約 10 ～ 20cm の日干レンガ片、約 5cm の礫を含む。西側から流れ込んできた過去の発掘調査の排土と考えられる。
2. 黄色細砂層：風成砂層。
3. タフラチップ混じり黄色細砂層：風成の黄色の細砂に約 1 ～ 3cm のタフラチップが少量混じる。
4. 黄色細砂層：上層の第 2 層の黄色細砂層と同質だが、よりしまりがあり黄色みの強い風成砂層。ローマ支配期の遺物を含む。
5. ローマ支配期の土器、日干レンガ片、石灰岩片などが集中。

発掘調査の結果、北東方向に面した岩盤の露頭が確認されるとともに、更にその上に石灰岩の壁が建てられていることが明らかとなった（図 4-6, 写真 1）。この石灰岩の壁は、モルタルなどが使われていない、いわゆる空積みであり、発見時には一部崩落していた。石灰岩の壁は、北側にまだ続いており、今期調査で確認された限りでは、高さ約 1.9m、幅約 3.5m、長さ約 10m である。また、壁の北側では、その上に 1 段から 2 段の日干レンガ列が見られた。

更に、岩盤の下からは、北側と南側に、概ね平行して北東方向に続く石灰岩の壁が見られた（写真 2, 3）。2 つの壁の距離は、約 3.5m である。なお、北側の壁については、上下で 2 つに分けることができ、上部はモルタルなどを使わない空積みで、下部はモルタルを使用して壁が建てられていた（写真 2）。下部の壁については、古代に作られたもので、上部の壁については、おそらく後世に、土留めの目的で築かれたと考えられる。

そして、この 2 つの壁の間から、日干レンガで作られた通廊の天井部分を発見した（写真 4）。通廊の天井は丸みを持っており、いわゆるヴォールト天井であると考えられる。通廊は西側の岩盤に接しており、おそらく岩盤を穿った岩窟墓の通廊であると考えられる。南北の壁と同じく、北東方向に伸びている。今期はこれらの壁、通廊を確認し、終了した。来期以降、これらの遺構の発掘調査を継続する計画である。

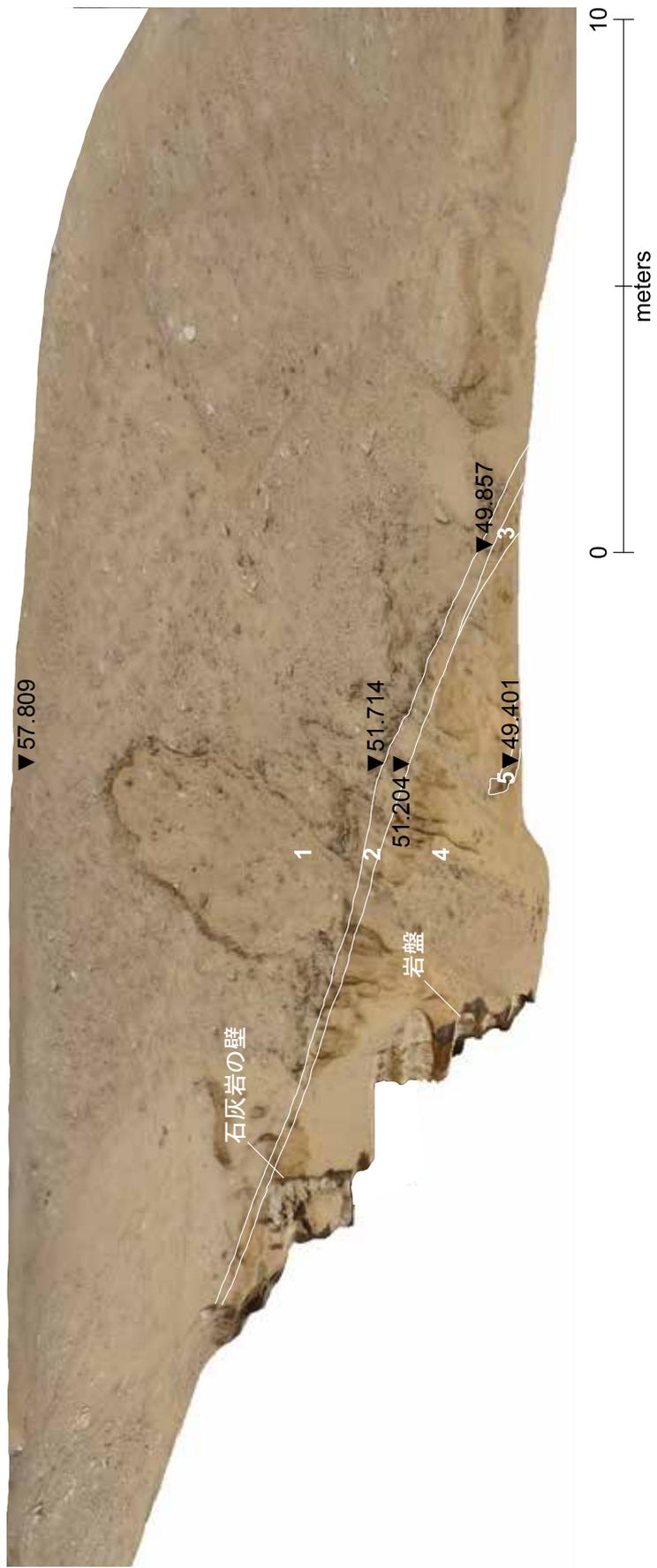


図3 発掘区北側セクション
Fig.3 The north stratigraphic profile of the excavation area

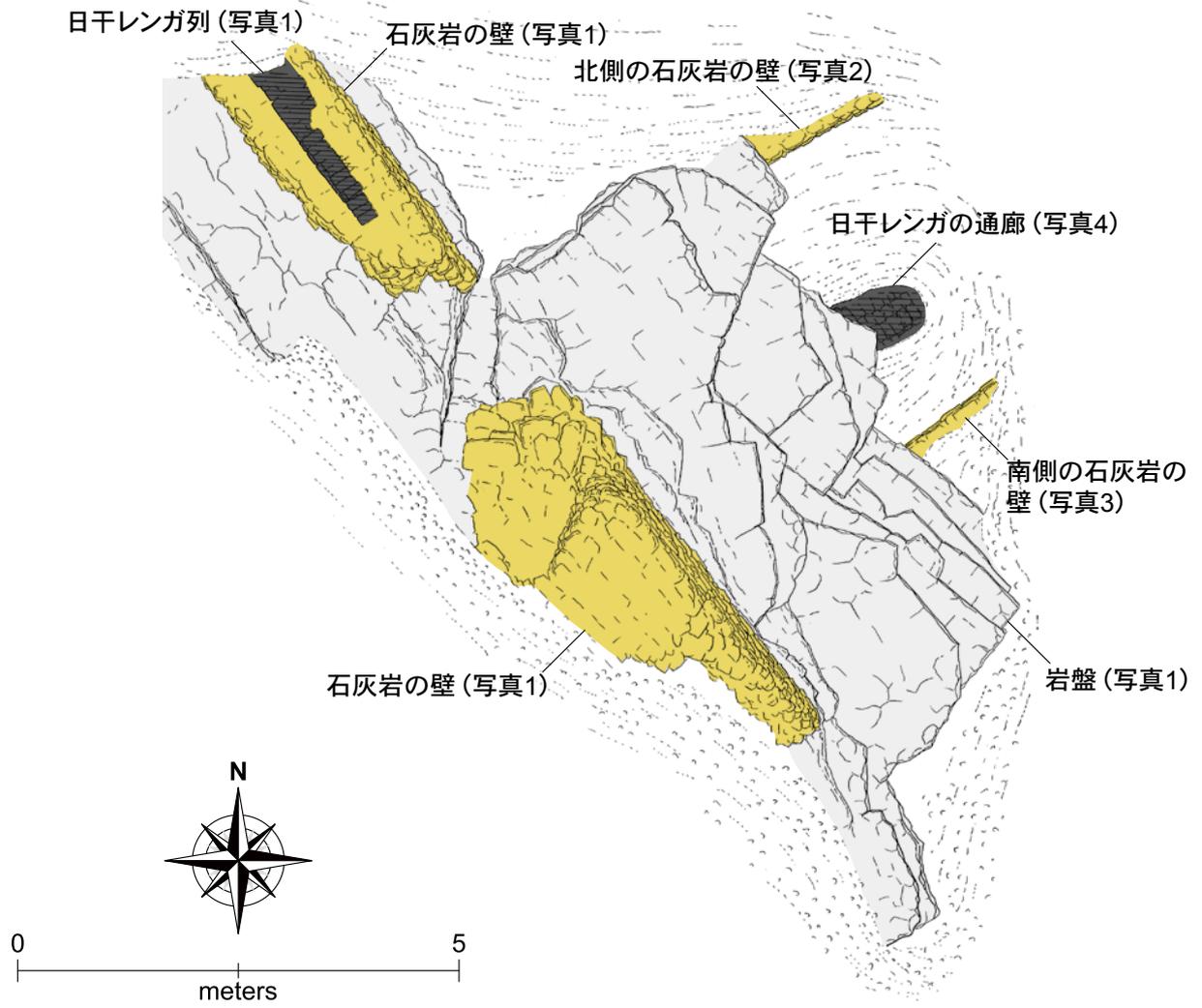


図4 出土遺構平面図
Fig.4 The plan of the area around the limestone walls

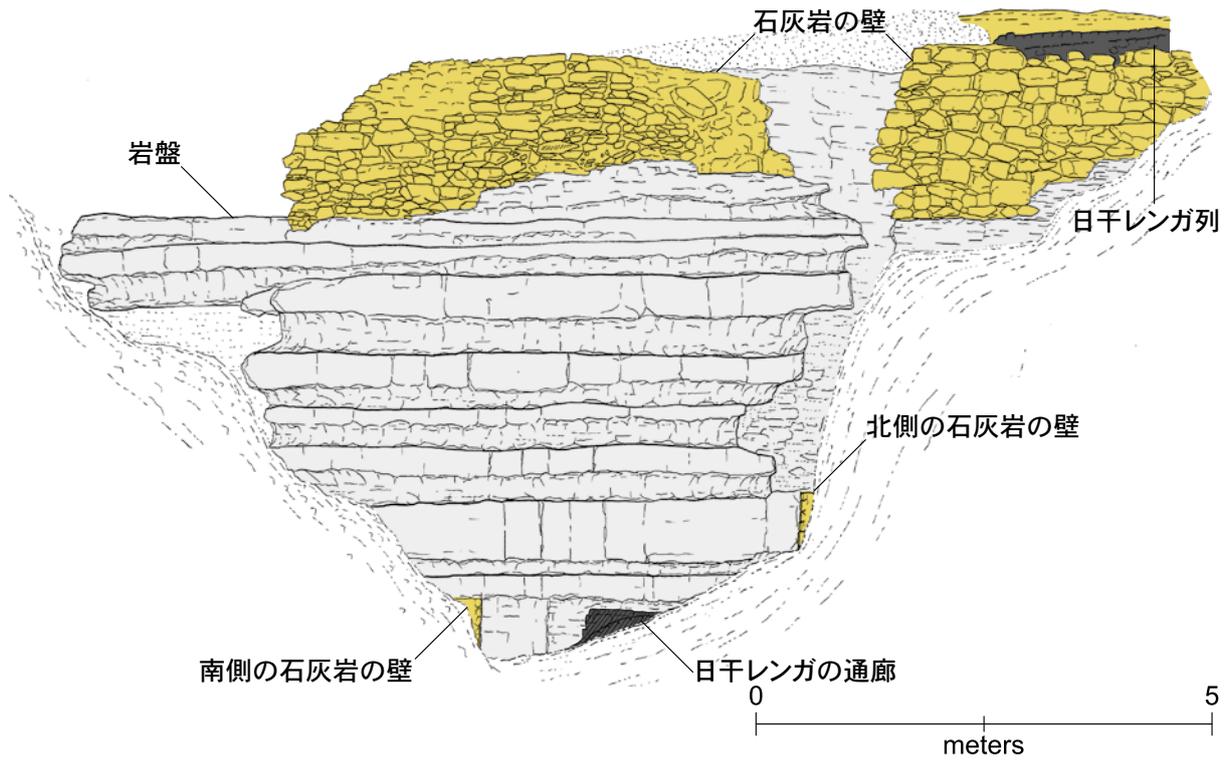


図5 出土遺構立面図
 Fig.5 The elevation of the area around the limestone walls

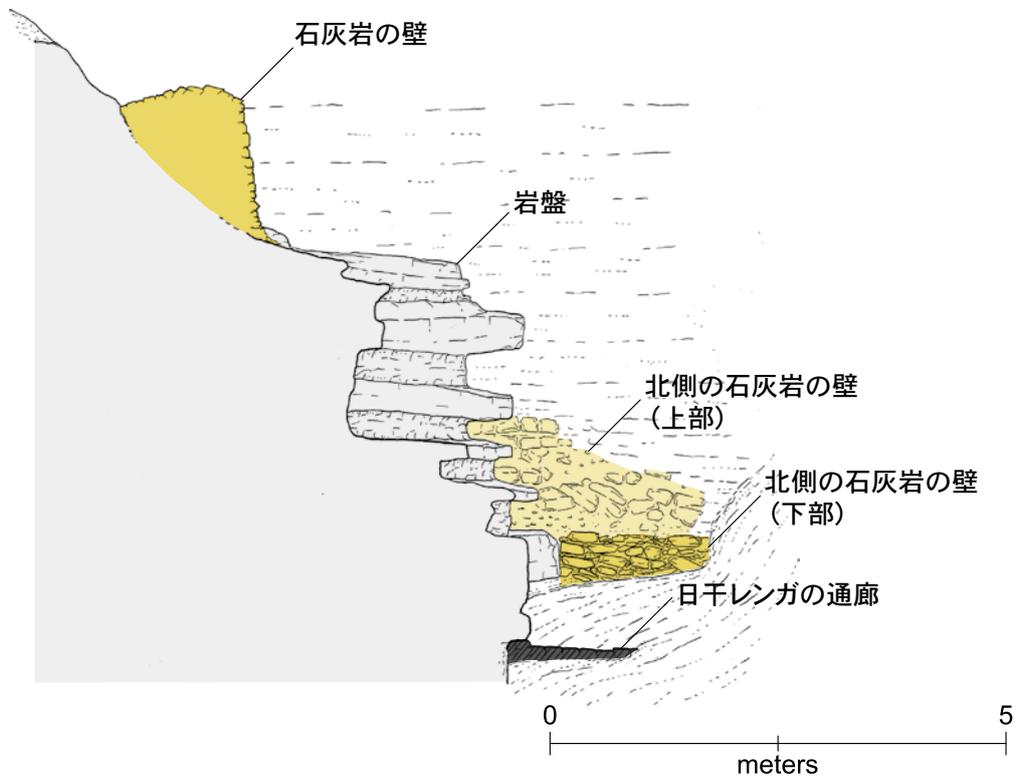


図6 出土遺構断面図
 Fig.6 The cross section of the area around the limestone walls



写真1 発掘区第4次調査終了時（東より）
Pl.1 The excavated area and the limestone wall on the bedrock after fourth season, viewing from the east



写真2 北側の石灰岩の壁
Pl.2 The northern retaining wall adjacent to the bedrock surface



写真3 南側の石灰岩の壁
Pl.3 The southern retaining wall adjacent to the bedrock surface



写真4 ヴォールト天井の日干レンガの通廊
Pl.4 The mud-brick vaulted ceiling adjacent to the bedrock surface

岩盤の東側では、砂上に直接埋葬された3体の人骨が出土した(図7, 写真5, 6)。形質人類学の専門家による調査はまだ行っていないものの、3体は成人と考えられる。出土状況からいずれも未盗掘であると判断した。埋葬は仰臥位伸展葬で、骨盤の上に両手を乗せている。頭位は、2体が南西、1体が北東を向く。布が巻かれている埋葬や頭の下に日干レンガが置かれている埋葬(写真5)、遺体の下にタフラが敷かれている埋葬(写真6)などが見られた。埋葬に伴う副葬品は出土していないものの⁵⁾、層位や埋葬の姿勢などから、ローマ支配期に年代づけられる可能性が考えられる。

また、岩盤の東側では、紀元後1世紀に年代づけられるローマ支配期の土器が集中して出土した(図7, 写真7)。土器群はアンフォラなどで構成され、また、土器の集中に混じって、日干レンガ片やイシス・アフロディーテなどのテラコッタ製像も出土している。土器の集中はまだ北側の未発掘箇所が続いており、今後の発掘調査を待って、土器の集中の性格について、検討してみたい。

その他、斜面上部の発掘では、動物骨がまとまって発見された。動物骨は、少なくともイヌのミイラが26体(そのうち数体は子犬)、ネコのミイラが数体確認された。動物墓地に埋葬されているような完全な形のミイラは出土しなかったが、一部分が残存しているミイラが数点確認された。発掘区の近隣にはアヌビエオンやブバステイオンなどの動物墓地在確認されており、これらの動物骨は同様の墓地に関連すると考えられる。また、層位の観察から、これらの動物骨は、近隣の動物墓地の盗掘もしくは発掘の排土としてもたらされた可能性が考えられる⁶⁾。

(2) 単純埋葬の概要

第4次調査の注目される成果として、前述の3体の未盗掘の単純埋葬が挙げられる。以下に、各埋葬の詳細について記す。

① NS04-o00454 (写真5)

出土層位：黄色細砂層

頭位方向：南西

埋葬姿勢：仰臥位伸展葬、手は骨盤の上

身長：1.77m

その他：布片が出土しており、ミイラ処理が行われていた埋葬と考えられる。頭部の下には、日干レンガが発見されている。顔は左を向いているが人為的かは不明。

② NS04-o00613 (写真6)

出土層位：黄色細砂層

頭位方向：北東

埋葬姿勢：仰臥位伸展葬、手は骨盤の上

身長：1.6m (足首以下が欠損)

その他：脚部に布と考えられる痕跡が確認されており、ミイラ処理が行われたと考えられる。頭部の下には、日干レンガが発見されている。また、遺体の下に、おそらく意図的に敷いた白色のタフラの層がある。

③ NS04-o00614 (写真6)

出土層位：黄色細砂層

頭位方向：南西

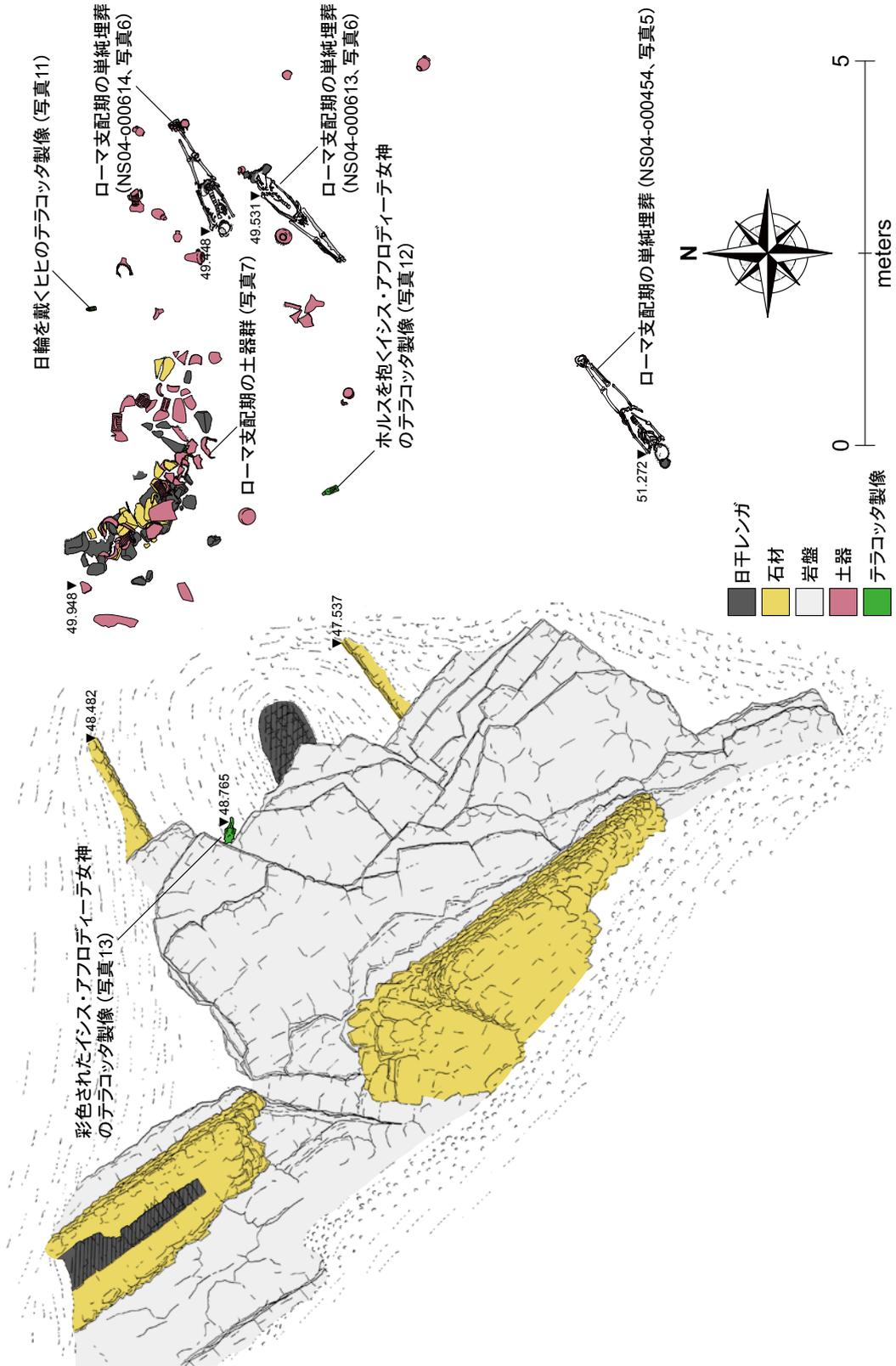


図7 埋葬および遺物の出土場所
 Fig.7 The distribution of the burials and finds in the excavated area



写真5 単純埋葬 (NS04-o00454)
Pl.5 Intact simple burial to the east of the bedrock surface



写真6 単純埋葬 (NS04-o00613, o00614)
Pl.6 Intact simple burials to the east of the bedrock surface



写真7 ローマ支配期の土器の集中
Pl.7 Debris deposit of Roman pottery vessels

埋葬姿勢：仰臥位伸展葬、手は骨盤の上

身長：1.62m

その他：脚部にミイラ布が残存しており、ミイラ処理が行われた埋葬である。

これらいずれの埋葬も布片や部分的に布が巻かれた状態で出土している。ミイラ布に関しては、ある段階で埋葬が露出していた際、もしくは砂中で肉体とともに風化し、骨のみが埋葬として残存したと考えられる。また、NS04-o00454（写真5）およびNS04-o00613（写真6）の頭部の下には、日干レンガが発見されている。複数の埋葬から同じ状況で日干レンガが出土していることから、埋葬時に人為的に置かれた可能性が考えられる。

4. 出土遺物

ここでは、今期の調査において出土した主な遺物について報告する。

(1) アミュレット

① シュウ神のファイアンス製アミュレット（写真8）

NS04-o00456、Area 2 黄色細砂層、幅 1.2cm、高さ 2.1cm、厚さ 0.9cm。

跪いて両手を挙げた姿勢のシュウ神で、背面には支柱がある。支柱には紐を通すための孔がある。シュウ神をモチーフとするアミュレットは第3中間期からプトレマイオス朝時代に見られ、ミイラの下半身に置かれて副葬される（Andrews 1990: 19）。類例は、ジェセル王の階段ピラミッド西側にあるプトレマイオス朝時代の墓域（Radomska et al. 2008: 391–396, fig.481.a)8, pl.CCLVI.h）やホルエムヘブ墓の前庭部（Raven et al. 2011:

115-116, cat.165, 166) から出土している。ただし、いずれも風成砂層から出土しており本来のコンテキストについては不明瞭である。

(2) スカラベ

①ステアタイト製スカラベ (写真 9)

NS04-o00380、トレンチ C 清掃中、幅 1.4cm、高さ 1.9cm、厚さ 1.0cm。

緑色の釉薬がかかったステアタイト製のスカラベが 1 点出土した。腹面には上からパピルス、その下の中央に *nh* と *t* のサイン、その両側に赤冠のサイン、そして最下部には *nb* のサインが刻まれている。類似したモチーフが刻まれたスカラベは第 2 中間期から第 18 王朝初期に見られる (Ben-Tor 2007: 79, pl.53)。

(3) ガラス製品

①ガラス製容器片 (写真 10)

NS04-o00458、Area 3 黄色細砂層、口径 2.1cm、器壁の厚み 0.1 ~ 0.2cm。

ガラス製容器の口縁部が岩盤近くから出土した。透明な淡緑色、ガラスの内部には細かな気泡が含まれている。口縁部の形状や口径から、長頸瓶の一部であると考えられる。長頸瓶は紀元後 1 世紀から 3 世紀のローマ帝国内で見られるものである (Hayes 1975: 42, 133)。特にこの容器片は紀元後 2 世紀から 3 世紀のファイユームなどで見られる例に類似している (Harden 1936: 197, no.530, pl.XVII; Hayes 1975: 137, no.533, fig.17)。

(4) テラコッタ製像

今期調査では、4 点のテラコッタ製像が発見された。3 点はローマ支配期の土器の集中と同じレベルから出土し、また 1 点は土器の集中内部から出土した。土器の集中との関連が注目される。

①月輪を戴くヒヒ (写真 11)

NS04-o00628、Area 3 黄色細砂層、幅 5.6cm、高さ 12.9cm、厚さ 6.1cm。

ヒヒの姿を象ったテラコッタ製像。ヒヒは、頭に月輪を戴き、両手を膝の上に乗せて屈んでいる。部分的に、白色プラスターの上に赤色や黒色の顔料が残存している。足裏部分から内側には空洞がある。また、背面には 2 か所に円形の穿孔が開けられており、一方の穿孔は腹面まで貫通している。内側に空洞があり、背面に円形の穿孔がある構造はプトレマイオス朝時代に見られる特徴である (Thomas n.d.: 4-5)。

類例は、デルタ地帯のテル・ティマイからの出土品 (Benett 2016: 11-12, fig.35) やアレキサンドリア国立博物館の収蔵品 (Breccia 1934: 57, 58, no.400, 401, pls.LII.259, CXI.642) に求められる。テル・ティマイから出土した資料はプトレマイオス朝後半からローマ支配期前半に年代づけられている (Benett 2016: 11-12)。近隣の遺跡では、石灰岩製だが、類似したモチーフの小像が北サッカラの動物墓地から出土している (Davies 2006: 93, 94, pls.XLIII-XLV)。

②ハルポクラテス (ホルス) を抱くイシス・アフロディーテ女神 (写真 12)

NS04-o00467、Area 3 黄色細砂層、幅 7.6cm、高さ 20.1cm、厚さ 6.0cm。

ハルポクラテス (ホルス) を抱くイシス・アフロディーテ女神が象られている。表面の摩耗が著しく、彩色の痕跡は認められない。足裏部分から内側は空洞になっており、背面中央付近には円形の穿孔が開けられている。前述したように、このような構造のテラコッタ製像はプトレマイオス朝時代に見られる (Thomas n.d.: 4-5)。同様のテラコッタ製像は、ファイユーム、バテン・ハリト、テル・バスタなどから出土している (Dunand



写真8 シュウ神のファイアンス製アミュレット
Pl.8 Faience amulet of god Shu



写真9 ステアタイト製スカラベ
Pl.9 Steatite scarab

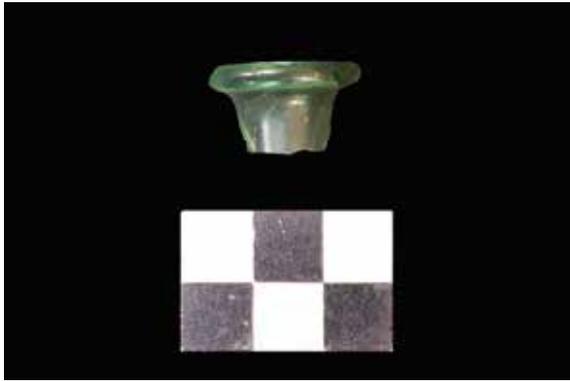


写真10 ガラス製容器片
Pl.10 Rim of glass vessel



写真11 月輪を戴くヒヒのテラコッタ製像
Pl.11 Terracotta figurine of baboon



写真12 ハルポクラテス（ホルス）を抱く
イシス・アフロディーテ女神のテラコッタ製像
Pl.12 Terracotta figurine of
goddess Isis-Aphrodite holding Hours



写真13 彩色されたイシス・アフロディーテ女神の
テラコッタ製像
Pl.13 Painted terracotta figurine of goddess Isis-Aphrodite



写真14 石灰岩製供物卓
Pl.14 Limestone offering table



写真15 石灰岩製レリーフ片
Pl.15 Limestone relief

1974: 165–167, nos.1–7, pls.I–VI)。

③彩色されたイシス・アフロディーテ女神 (写真 13)

NS04-o00578、Area 3 黄色細砂層、幅 17.8cm、高さ 53.9cm、厚さ 8.2cm。

類例から紀元後 1 世前から紀元後 2 世紀 (プトレマイオス朝時代末期～ローマ支配期初期) に年代づけられる (Hill 2000: 93, fig.73)。カラトス (Kalathos) と呼ばれる編み籠を表現した頭飾りを身につけている。頭飾りと本体は別々に焼成され、その後、白色のプラスターで接合されている。頭部にはぶどうの装飾が施され、手にはヘビを持っている。

(5) 供物卓

①石灰岩製供物卓 (写真 14)

NS04-o00578、Area 3 黄色細砂層、幅 42.1cm、高さ 22.5cm、厚さ 8.9cm。

岩盤の露頭の下の方南壁の南西角付近から供物卓が出土した。層位から、原位置の出土ではなく流れ込みと考えられる。浮き彫りから 3 つのヘテプのサインとその下に 3 つの窪みがある。左側の 2 つのヘテプのサインの間には *htp-di-nsw* 定型文が刻まれている。様式から中王国時代か新王国時代に年代づけられると思われる (Bolshakov 2001)。おそらく墓の偽扉の前に配されていたのであろう。

(6) レリーフ

①石灰岩製レリーフ片 (写真 15)

NS04-o00586、Area 4 黄色細砂層、幅 7.8cm、高さ 19.5cm、厚さ 12.5cm。

ローマ支配期に年代づけられる土器の集中とともに出土した。左側に女性の頭部像、右側に人物の右腕の一部が沈め浮き彫りで表されている。おそらく、右側は右腕の曲がった角度から頭に手を当てた悲しむポーズの人物の姿が描かれていたと推測され、このことから葬列のモチーフの一部を構成していたレリーフ片と考えられる。時代は人物像の様式からラメセス朝のものとみられる。このような葬列のモチーフは、新王国時代のサッカラのトゥームチャペルで頻繁に描かれていたことが知られており (Martin 1987)、このレリーフ片も付近のラメセス朝時代の墓由来のものと推測される。

(7) 土器⁷⁾

今期調査では、岩盤東側の黄色細砂層から土器が集中して出土した (図 7, 写真 7)。東部砂漠の採石場であるモンズ・クラウディアヌスやモンズ・ポルフィリテスなどから出土した土器の類例から、紀元後 1 世紀前後のローマ支配期に年代付けられる。土器群は、アンフォラ (NS04-o00580; 写真 16, 17)⁸⁾ が主であり、その他、皿形土器 (NS04-o00616; 写真 18)⁹⁾、把手付き壺形土器 (NS04-o00630; 写真 19)¹⁰⁾、壺形土器 (NS04-o00538; 写真 20)¹¹⁾、把手付き壺形土器 (NS04-o00631; 写真 21)¹²⁾ などが含まれている。土器の集中には、日干レンガ片、焼成煉瓦片、石灰岩片なども含まれており、また、テラコッタ製像片も出土している。土器の集中は、更に北側に続いており、今後、全体を明らかにした上で、その性格について検討してみたい。

5. まとめ

第 4 次調査では、第 3 次調査の試掘区の北西約 20m の地点で岩盤の露頭とその上に配された石灰岩製の壁体を発見した。そして、岩盤の露頭の下にも石灰岩製の壁体と岩窟墓に続くと考えられる日干レンガ製のヴォールト構造の通廊の天井を発見することができた。岩盤の東側からは、ローマ支配期に年代付けられる未盗掘の



写真 16 アンフォラ
Pl.16 Rim to neck of amphora



写真 17 アンフォラ
Pl.17 Base of amphora



写真 18 皿形土器
Pl.18 Dish with the trace of burning



写真 19 把手付き壺形土器
Pl.19 Juglet with one handle



写真 20 壺形土器
Pl.20 Jar so-called "cooking pot"



写真 21 把手付き壺形土器
Pl.21 Jar with two handles

3体の埋葬が発見され、また紀元後1世紀のローマ支配期に年代づけられる土器群とテラコッタ製像などが出土した。これらの出土状況から調査区は、ローマ支配期以降、我々が発掘するまで手付かずであったことが判明した。

次期調査では、特に天井の一部が確認できたヴォールト構造の通廊とその先に存在すると考えられる岩窟墓の発掘調査を目標として、遺構の全容の解明に努めたい。

謝辞

本調査は、金沢大学超然プロジェクト「文化資源マネジメントの世界的研究・教育拠点形成」、金沢大学新学術創成研究機構ユニット経費、科学研究費補助金新学術領域研究「都市文明の本質」計画研究3「古代エジプトにおける都市の景観と構造」(課題番号:18H05446)による成果である。エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣カーレッド・アル＝アナニー閣下(博士)、考古最高評議会事務総長ムスタファ・ワジーリー博士、外国調査隊管轄事務局長ナシュア・ガーベル博士、古代エジプト部部長アイマン・アシュマウィ博士、サッカラ査察局長サブリ・ファラグ氏、同部長ハニー・アブドアッラー・アル＝タイプ博士、ムハンマド・ユーセフ氏、サッカラ外国調査隊管轄事務局長サミール・ラマダン氏、主任査察官のマハムード・シャーバーン氏、我々の調査の査察官イスマイル・ムスタファ氏を始めとする方々に多大なご協力を頂いた(肩書きは調査時のもの)。カイロでは、早稲田大学エジプト学研究所カイロ・オフィスの吉村龍人氏、ムハンマド・アシュリー氏に考古省との渉外などで大変お世話になった。また、金沢大学人文学類フィールド文化学コース(考古学特別プログラム)の岡部 睦氏には調査資料の整理作業などを手伝っていただいた。

ここに記して感謝の意を表する。

註

- 1) メンフィスの墓地であるサッカラの概要と研究の問題点については、以下を参照(河合 2017)。
- 2) 調査区は、テティ王のピラミッドの北東、アヌビエイオンの北側に位置し、旧イギリス調査隊の発掘宿舎と旧査察局の間にあたる。
- 3) 調査の参加者は以下の通りである。考古班:河合 望、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美、岡部 睦、建築班:柏木裕之、動物考古班:サリーマ・イクラム、現地渉外:吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
- 4) 本調査区は西側から東側に降る斜面になっており、斜面は真西に対して約20度振れている。従って、実際には南、北、東、西はそれぞれ南南東、北北西、東北東、西南東となる。ただし、方向が分かりにくくなるため、本稿ではそのまま南、北、東、西を用いることとする。
- 5) 単純埋葬のすぐ脇には、ローマ支配期の土器が見られるが、逆になっていることなどから、これは土器集中の一部であり、副葬品ではないと考えられる(写真6)。単純埋葬の後に、この土器集中が形成されたと考えられる。
- 6) 動物骨の概報に関しては、サリーマ・イクラムによる報告を参照(イクラム 2020)。
- 7) 土器の胎土に関しては10倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システムを参照し、記述を行った(Nordström and Bourriau 1993; Bourriau et al. 2000: 130-132)。胎土の色調に関しては、マンセルのカラーチャートを用いて記述を行った。土器の器形分類に関しては、最大径と高さの関係などの数値に基づいた器形分類を参考に、エジプトの土器研究で一般的に用いられている英語名称を日本語に訳し、名称を付した(Aston 1998: 41-51)。
- 8) 類例は、東部砂漠の採石場であるモンズ・クラウディアヌスにあり、ハドリアヌス帝以降に年代づけられる(Tomber 2006: fig.1.57.12-859, 12-860; Tomber 2007: fig.3.2)。その他、デルタ地域のマレオタイデなどに類例がある(Empereur and Picon 1992: fig.3)。
- 9) 口縁付近に焼成の痕跡あり。
- 10) 類例は、モンズ・クラウディアヌスにある(Tomber 2006: fig.1.20.26-220, 29-224)。
- 11) “cooking pot” と呼ばれる器形である。類例は、モンズ・クラウディアヌス(Tomber 2006: figs.1.29.31-366, 1.30.37.380)、モンズ・ポルフィリテス(Tomber 2001: fig.6.4.42) など。
- 12) 類例はアヌビエイオンに見られる(French and Bourriau 2018: fig.14.h.)。

参考文献

- Andrews, C.
1990 *Ancient Egyptian Jewelry*, London.
- Aston, D.A.
1998 *Die Keramik des Grabungsplatzes Q I. Teil 1: Corpus of Fabrics, Wares and Shapes*, Mainz am Rhein.
- Bennett, J.E., Littman, R. J. and Silverstein, J.
2016 *The terracotta figurines from Tell Timai: 2009-2013*, Oxford.
- Ben-Tor, D.
2007 *Scarabs, Chronology, and Interconnections: Egypt and Palestine in the Second Intermediate Period*, Göttingen.
- Bolshakov, A.O.
2001 “Offering Tables”, in Redford, D. (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, vol.2, Oxford, pp.572–576.
- Bourriau, J., Nicholson, P.T and Rose, P.
2000 “Pottery”, in Nicholson, P.T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.121–147.
- Breccia, E.
1934 *Monuments de l'Égypte gréco-romaine*, II, 2, Bergamo.
- Davies, S.
2006 *The Sacred Animal Necropolis at North Saqqara: The Mother of Apis and Baboon Catacombs, The Archaeological Report*, London.
- Dunand, F.
1974 *Religion populaire en Égypte Romaine*, Leiden.
- Empereur, J.-Y. and Picon, M.
1992 “La reconnaissance des productions des ateliers céramiques: l'exemple de la Maréotide”, *Ateliers de Potiers et Productions Céramiques en Égypte, Cahiers de la Céramique Égyptienne* 3, pp.145–152.
- French, P. and Bourriau, J.
2018 *The Anubieion at Saqqara IV: Pottery of the Late Dynastic Period With Comparative Material from the Sacred Animal Necropolis*, London.
- Harden, D.B.
1936 *Roman glass from Karanis: found by the University of Michigan Archaeological Expedition in Egypt, 1924-1929*, Ann Arbor.
- Hayes, J.W.
1975 *Roman and pre-roman glass in the Royal Ontario Museum*, Toronto.
- Hill, M.
2000 “Roman Egypt”, in Milleker, E.J. (ed.), *The Year One: Art of the Ancient World East and West*, New York, pp.78–101.
- Martin, G.T.
1987 *Corpus of Reliefs of the New Kingdom from the Memphite Necropolis and Lower Egypt*, London.
- Nordström, H-Å and Bourriau, J.
1993 “Ceramic Technology: Clays and Fabrics”, in Arnold, D. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz am Rhein, pp.143–190.
- Radomska, M., Kowalska, A., Kaczmarek, M. and Rzeuska, T.I.
2008 *Saqqara III, The Upper Necropolis, Part I: The Catalogue with drawings*, Warsaw.
- Raven, M.J., Verschoor, V., Vugts, M. and van Walsem, R.
2011 *The Memphite Tomb of Horemheb, Commander-in-Chief of Tutankhamun, V: The Forecourt and the Area South of the Tomb with Some Notes on the Tomb of Tia*, Leiden.
- Thomas, R.
n.d. *Naukratis: Greeks in Egypt: Ptolemaic and roman figures, models and coffin-fittings in teracotta*, https://research.britishmuseum.org/pdf/Thomas_Ptolemaic_figures.pdf.
- Tomber, R.
1992 “Early Roman Pottery from Mons Claudianus”, *Cahiers de la Céramique Égyptienne* 3, pp.137–142.
2001 “The Pottery”, in Maxfield, V.A. and Peacock, D.P.S. (eds.), *The Roman Imperial Quarries: Survey and Excavation at Mons Porphyrites 1994-1998, vol.I*, London.

- 2006 “The Pottery”, in Maxfield, V.A. and Peacock, D.P.S. (eds.), *Survey and Excavation, Mons Claudianus 1987-1993, Vol. III: Ceramic Vessels and Related Objects*, pp.3-236, Cairo.
- 2007 “Early Roman Egyptian Amphorae from the Eastern Desert of Egypt: a Chronological Sequence”, *Cahiers de la Céramique Égyptienne* 8, pp.525-536.

河合 望

- 2017 「メンフィス・ネクロポリスの調査と研究」、常木 晃、西秋良宏、山内和也（編）、『西アジア考古学・最新研究の動向』季刊考古学第141号、雄山閣、pp.83-86.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花

- 2017a 「第1次北サッカラ遺跡踏査概報」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.127-144.

河合 望、三井 猛、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、梅田由子、米山由夏、石崎野々花

- 2017b 「第2次北サッカラ遺跡踏査概報」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.145-181.

河合 望、三井 猛、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、梅田由子、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美

- 2018a 「第3次北サッカラ遺跡踏査概報：踏査・測量・探査報告」、『エジプト学研究』第24号、日本エジプト学会、pp.48-81.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美

- 2018b 「第3次北サッカラ遺跡調査概報：試掘調査」、『エジプト学研究』第24号、日本エジプト学会、pp.82-112.

サリーマ イクラム

- 2020 「2019年度北サッカラ調査における動物遺存体とミイラに関する調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.66-73.

エジプト学研究 第26号

2020年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.26

Published date: 31 March 2020

Published by The Japan Society of Egyptologist

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Society of Egyptologist